

氏名	ヒビミワコ 日比美和子
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第224号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉無調音楽における声部進行の規則の検証 — シェーンベルク作曲 《弦楽四重奏曲第二番op. 10》より終楽章〈忘我〉へのユージン・ナ ームアの暗意／実現モデルの適用から —

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	片山千佳子
(副査)	〃	〃	(〃)	土田英三郎
(〃)	〃	〃	(〃)	大角欣矢
(〃)	〃	准教授	(〃)	福中冬子
(〃)	〃	教授	(〃)	小鍛冶邦隆
(〃)	玉川大学	教授	(芸術学部)	高岡明

(論文内容の要旨)

本論文の目的は、無調音楽における声部進行voice-leadingの規則を明らかにするために妥当な方法の提示である。20世紀後半の北米では、無調で書かれた作品の構造を明らかにすることを目的として、様々な分析方法が生み出された。私はその多くは次の2つの観点のいずれか又は両方に基づいていると考える。すなわち類似概念similarityと声部進行である。類似概念とは、ピッチクラス集合論や変換理論transformational theoryに見られるように、複数のピッチクラス集合が共通の内包を有する場合に「類似している」とみなす考え方である。一方、声部進行の観点に基づく分析は、ポストシェンケリアン分析、リニアアナリシスlinear-analysis、変換理論などが代表する、ポスト調性音楽の声部進行の規則を明らかにしようとする試みである。

類似概念、声部進行といういずれの観点からの分析方法もある問題を共有している。それはこれらの分析方法のほとんどが、無調音楽の領域において音楽的に有意なグループ化（分節化）を行っていないということである。類似概念の背後には、音楽的対象musical entitiesの分類に際して、同じカテゴリーに属するメンバー間の類似性を内包と捉えるという発想がある。しかし、類似概念における内包は、そのほとんどが音楽的に無意味、すなわち音楽認知の観点からは音楽的類種musical kindではない。音楽的対象と音楽的類種の違いは、前者があらゆる音楽的要素を指すのに対して、後者はある一定の領域内でのみ存立する点である。音楽的類種とは、私たちの音楽的認知能力が音楽作品を構成する基本単位として認める音楽的対象の集合を指す。高岡（Takaoka 2010）は、無調音楽にも無調音楽固有の音楽的類種が存在するのではないかと仮定し、それを無調の音楽的類種atonal kindsと呼んでいる。高岡によれば、無調の音楽的類種はクワイン（Quine 1960）の自然種natural kindsに由来する。哲学における自然種とは、人工的な分類ではなく、自然な分類としての事物の分類のことである。無調音楽の分析において複数の集合が類似していることを示しても、その集合同士が無調音楽の領域で有意の内包を有していなければ、分類の方法を新しく生み出しているにすぎない。類似概念だけでなく、ピッチクラス集合論や変換理論におけるグループ化（分節化）segmentationや、声部進行に基づく理論が声部進行を選択する方法も、同様の問題、すなわち無調音楽の領域における音楽的有意性という問題を共有している。

この問題の解決に有効だと思われるのは、音楽認知の視点から作られた理論、ナムア（Narmour 1990,

1992)の「暗意／実現モデル (I/Rモデル) implication-realization model」である。I/Rモデルは、音のまとまりが旋律などの何らかの意味を持つ集合として認識されるにはどのような条件を満たさなければならないかを考えるのにふさわしい。ただしI/Rモデルは主に調性音楽を分析対象としているため、そのまま無調音楽の分析に用いることはできない。たとえば調性音楽のように「解決」が必ずしも生じない無調音楽において、グループ(分節)を作る「区切り」を生じさせる要素は限られてしまう。したがってそれに相当するものが必要である。私はブラウン(Browne 1981)及びバトラー(Butler and Brown 1981)による「ポジション探索 position finding」が、その代用になると考えた。ポジション探索は、聴き手が音楽を聴く際に自分が12のダイアトニック集合の中のどこにいるかを常に探しているという考えに基づいている。ブラウンによれば、聴き手は三全音や短2度といった1つのダイアトニック集合の中での出現頻度の少ない音程を手掛かりに、常に自分のポジションを探している。私はこのポジション探索は、無調音楽においても「区切り」を作る要素になり得ると考えた。

本論文ではI/Rモデルとポジション探索を組み合わせた分析が、無調音楽の分析においてもある程度音楽的に有意なグループ化(分節化)を可能にすることを証明するために、I/Rモデルとポジション探索をシェーンベルク作曲《弦楽四重奏曲第二番 op. 10》より無調で書かれた終楽章〈忘我 Entrückung〉に適用した。I/Rモデルのみでも、無調音楽の分析において、ある程度旋律のクロージャ closure (I/Rモデルでは一種の区切りを指す)が説明できる。加えてポジション探索は、声部進行の規則を説明することができる。ポジション探索の考え方では、完全終止などの終止が生じていないとしても、聴き手は、その前の部分で1つのダイアトニック集合に自分のポジションを見つけられた場合、その場所を「半終止」のように聞くことになる。したがって、その次に完全終止が現れないとしても、そこに一種の「終止」が生じているとみなすことになる。つまり、その部分にクロージャの発生を認めている。特定のダイアトニック集合の暗意は、I/Rモデルにおけるクロージャの発生の要因とみなすことができるのである。このように本論文はI/Rモデルとポジション探索を組み合わせることによって、無調音楽の分析においても、ある程度音楽的に有意なグループ化(分節化)を行えることを明らかにした。

#### (総合審査結果の要旨)

本論文は、無調音楽における「声部進行 Voice Leading」の規則について、北米を中心とした先行研究の方法論上の問題点を詳細に検討したのちに、認知心理学的なナムアの「暗意／実現モデル」によるクロージャ形成とブラウン&バトラーの「ポジション探索」の手法を組み合わせた分析を、シェーンベルクの《弦楽四重奏曲第2番》(1907-1908)の終楽章に適用したものである。

論文審査会においては、本論文に対する評価は分かれた。この論文を先進的かつ意欲的な試みとする意見は、無調音楽のピッチ構成規則の解明という困難な課題に取り組み、とくに実際の楽曲分析において、北米では相容れないものとされる「ピッチクラス集合論」と「暗意／実現モデル」理論との補完を試みた点に、高い評価を与えるものであった。他方、申請者のアプローチに危うさを感じる見方としては、そもそもポスト調性音楽における「声部進行」とは何か、その「規則」とは何かが明確に定義されないまま論述が進められていくこと、さらには、調性音楽に内在する身振りを明らかにするための認知心理学的方法である「暗意／実現モデル」とダイアトニック集合を前提とした「ポジション探索」を、無調音楽に適用しようとしたことに矛盾を認めるものであった。

申請者の分析は確かに一定の成果を示しているが、それは分析対象が調性音楽の記憶が色濃いシェーンベルクの初期の無調作品であったから可能となった、とも言うことができる。申請者が主張する分析方法がどこまで妥当であるのかは、同時期やそれ以降の複数の作品にその分析を適用してみる必要がある。これは今後に残された大きな課題であろう。論文全体において、用語の定義や用語の使用がかなり不用意で正確さを欠いていること、また先行研究の検討や楽曲分析の提示に、ともすると冗長になる傾

向が認められた。しかし、北米における新しい理論を精査し、それらが含む問題点を明確にした上でともかくも自分なりの楽曲分析を提示したことは、申請者の研究者としての真摯な探求心と鋭い問題意識なくしては不可能であった。本論文は、申請者が今後の研究を続けていく上で、優れた調査能力と分析力を備えていることを余すことなく証明している。